



河村 武 編

気候変動の周期性と地域性

古今書院, 1986年9月刊,
304頁, 6,000円

不思議な本である。

ここ一、二年欧米を中心に気候学関連の雑誌が相次いで創刊され、気候変動の研究はますます学際的になりつつある。こうした中で、わが国における気候学研究の現状のある一面とその限界や新たな方法論の萌芽を本書は感じさせてくれる。書評子は本書を読んで、「気候学とはなんだろうか」と自問せずにはいられなかった。

本書は、昭和58年度から3年にわたって行われた本書と同題の文部省科学研究費総合研究の成果をまとめた報告集である。構成は編著者による総合報告と、研究分担者17名の報告からなっている。各報告の紹介と批評は、詳しく述べるスペースもないし、また門外漢がとやかくいえる筋合いでもないのだから各論の表題を以下に掲げるとどめておく。

第1章 気候値の特性と気候変動の研究の問題点

1. 1 気温の平年値算定のための統計年数について
1. 2 気候変動の時空間スケールに関する一考察
1. 3 年輪分析による気候変動の周期性と地域性
1. 4 気候変動の研究における都市気候の意義

第2章 世界の気候変動

2. 1 気温による気候変動・変化の把握とその問題点
2. 2 東アジアの夏の降水量の地域性
2. 3 東部赤道太平洋の海面温度変動時に現れる大気大循環および極東地域の天気変動
2. 4 ブラジル北東部における降水量の変動
2. 5 アフリカの降水量の変動

第3章 日本気候変動の諸問題

3. 1 土佐清水における大気の大気混濁の変動
3. 2 気圧の時系列変化の中に現れる周期性と気候変動
3. 3 南西諸島の気候変化
3. 4 都市化・工業化が降雨・降雪に及ぼす影響

第4章 近世における日本の気候変動の復元

4. 1 江戸時代の気候の復元
4. 2 18世紀末における日本の気候復元
4. 3 近畿地方における19世紀以降の気候変動
4. 4 古日記による幕末期の気候復元

表題からわかるように、内容は極めて多岐に及ぶ。各論の展開の仕方は、エッセイ風の軽い読物あり、論説あり、なかなかの力作あり、また名執筆者の過去の論文や報告書の単なる寄せ集めありと、これもいろいろである。執筆者それぞれの個性や意気込みがうかがえて楽しい。それにしても、値段が少し高過ぎはしまいか。

書評子は一般教養学生向けの気象・気候学関連の講義をする機会をもっているが、こうした講義で、局所的な気候変動の問題や歴史時代の気候復元に関する具体例を簡単に提示できる素材として、本書が役立ちそうである。また、どの執筆者も重要な参考文献を比較的豊富に、しかも資料の出所もかなり丁寧に掲げられている。その点で、これらの分野の文献探査には好適だし、地理的な気候学や古文書による気候復元の研究をこれから始める人々には、格好の本といえよう。

最後に本書全体を通しての苦言を二、三述べさせていただく。

執筆者が多く、また内容が多岐に及ぶとはいえ、一応一冊の本なのだから、使用語句のある程度の統一や記述のまとまりに注意を払って欲しかった。また、索引項目の不統一や項目の不十分さが目につく。執筆者が多い場合、これは編著者やむしろ編集者の側に責任があるのかも知れないが、索引というものは、単に引用された重要な語句の羅列ではないはずだ。索引の中にも、一冊の本の姿や執筆者・編集者の意気込みの一端が現れてくる。

一冊の書であるからには、単なる報告・論文の寄せ集めだけであっては困る。個々の報告が内容的にある程度完結していなければならぬ。この書より研究上のさまざまな疑問や新たな展望がうまれてくることは大いに期待したいが、他の引用文献を渉猟しなければ論旨の開展が読み取れないなどというのはもってのほかだ。

個々の報告の中には、気候変動や気候変化を論じる際の問題点がある程度整理されているものもあり、またこの分野での今後の研究に対する提言もいくつか散見される。しかし、全体としては、各執筆者がそれぞれ自由に書き散らした感は否めない。

こうした報告集から気候変動論の発展を見るには、まとめを序章での編著者による各報告の簡単な紹介でお茶を濁すのではなく、各章ごとにでもそれぞれの研究から得られた成果の比較検討をはじめとして、各論文の相互批判または総合討論的なものが望まれる。こうした作業を通して、単なる地理学的な気候学から、比較気候学ともいべきより一般性の高い新しい領域が生まれてきほしないだろうか。(京大大学院理学部 福山 薫)